

## 東日本大震災に思いを寄せる

10年前の3月11日(金)の午後2時46分、東北地方三陸沖を震源とするマグニチュード9.0の大地震が東日本を揺さぶりました。その直後に大津波が太平洋沿岸を直撃し、さらに福島原発の原子炉融解……これら国家的な危機といえる大災害はたった1日で尊い命をたくさん奪いました。大事な故郷と大切な人を同時に奪われ、今でも身内の帰りを待ち続ける被災した家族が大勢います。被災した人、しなかつた人、様々な形で私たちの心に震災の記憶が刻まれました。

当時、私はエンジニアを目指し電子工学を学ぶ京都の大学生でした。ポランティアとして実際に被災地へ赴き、自分の目で現場を確認し、被災者から直接声を聴きました。私は人生で初めて「命」と向き合い、自分の肌で感じたことを真剣に考え、その体験が医師を志すきっかけになりました。自分にとって震災は特別な出来事であり、人生の分岐点です。長いですが私の体験談に最後までお付き合い願います。

震災発生の時のことを今でも鮮明に覚えています。全てのテレビ番組が一斉に中断し、どのチャンネルに変えても同じCMやシャトル(ACジャパンの公共広告)が延々と繰り返されていたのです。後に宮城県仙石市の被害状況を伝える映像がヘリコプターからNHKの生中継で放送されました。激しい揺れで住宅街が完全に倒壊し、夜中に炎災と燃えあがる街姿をテレビで見ながら、これは只事じやないかと緊張感を募らせました。未曾有の非常事態。何か自分から出来ることはないか?と思っていたら、幸いにも知り合いから震災支援活動への参加者募集の情報を聞き、即座に参加することを決めました。テレビのニュースは飽きるほど繰り返され、それらの報道を見ながら居ても立っても居られなくなり、現地へ行き自分の目で確かめたかったのです。

私が初めて被災地の宮城県七ヶ浜町へ着いたのは震災発生からおおよそひと月半が経った頃でした。かの有名な日本三景の一つである松島に近接する小さな海辺の街です。被災地へ向かう道中に東北道で見た光景には絶句しました。高速道路の横へ広がる田んぼには、津波で押し流された瓦礫や車が散乱していたのです。到着した七ヶ浜町で最初に目にした光景も衝撃的でした。家屋は津波で流され瓦礫は無造作に分布し、漂着したコンテナやタイヤなどの粗大物が砂浜に打ち上げられていました。現地の空気は重油やヘドロが混じり、鼻をつく臭いが充満していました。復興支援が本格的に始まっており、崩壊した街からかき集められた瓦礫が山

積みで、見上げるほど高くなっていました。

高い丘に社会福祉協会のポランティアセンターが設置され、そこには被災住民からの様々な支援要望が寄せられていました。手付かずの案件は山程あり、私の一番最初の仕事は家屋清掃でした。清掃と言ってもほとんどが泥の掻き出しでした。ポランティアを必要とする住民は高齢が多く、力仕事を要するので明らかに住人だけで処理出来る範疇をはるかに越していました。朝から晩まで必死になって家の中から泥を出し、汗水流して土嚢袋に詰めました。肉体労働はしんどかったけれど、体の疲れは逆に心地よく感じられ、住人が差し出してくれた手作りのおにぎりやお茶をしみじみと有難く頂きました。塩味が効いたあの美味しさは特別で、未だに忘れられません。想像を絶する困難に遭遇しても、どんなに辛い状況にあっても、またいつか、家族が幸せに暮らした我が家に住みたいと切望する住人の心に秘めたる想いは、言葉にせずとも当人の背中や雰囲気から感じられました。

現地入りして気づいたことですが、被災した地元の方々に、全国から集まったポランティアに対し不信感がありました。ポランティア参加者の中には常識に欠けた人がおり、身勝手な行動や言動で被災者を傷つけたことが多々ありました。中には活動現場で許可も無く写真を撮ったり、自分たちの成果をひけらかすように参加者の名前を書いた看板を勝手に立てたりなど、あるまじき行動をとる人たちがいたのです。医療現場と同様に、私が接した被災者達は、自分よりも倍以上の人生を生きてきた方々でした。当時の私は被災者の方たちとの様にコミュニケーションを図り、どうやって信頼を得るかを熟慮しました。

瓦礫撤去や土木建築作業に炊き出し作業。短い2週間の中でできる限り、様々な被災者からの要望に応えました。活動中に地元の方々から被災体験話を沢山聞きました。迫り来る津波に飲み込まれ、逃げ遅れた娘を失った母親は、避難所から毎日、流されてしまった家の跡地に足を運んで、ポランティアたちに瓦礫撤去をお願いしていました。母親が語る生々しい話にどうやって受け答えしたらよいか分からず、自分は相手の目を見て、ただ頷くことしか出来ませんでした。

ポランティアをしながら驚いたことは、被災した殆どの方々がポジティブな態度であったことです。水も出ない。電気も無い。食料は限られ、車や家もない。家族や友人を失い、毎日、不自由な避難生活を送る苦しい状況にも関わらず、彼らはポランティアや支援者に感謝し「ありがとうございました」と深々一礼するのです。その姿を見つめながら、今まですべてが当たり前のように暮らしていた

自分のままではなくなりました。当たり前のように放っていた「ありがとう」と言う感謝の言葉の重みを、初めて感じました。こんなにも深く重い意味が詰まった行為と言葉があるだろうか!私は感嘆し、再びこの地へ戻ろうと決意したのです。

お金は無いが時間と体力はあります!最初のポランティアを終えた後も、大学の授業の合間をぬって、ほぼ毎月のペースで七ヶ浜町へ足を運び、現地で2週間程支援活動に参加することを1年間ほど続けました。継続的に顔を見せることで被災者の方々から信頼されるようになり、会うたびにいつも笑顔で迎えてくれました。信頼関係を築くことでより大きな仕事を任せられるようにもなりました。何ヶ月も過ぎていても、大きな瓦礫を撤去する時も、行方不明だったご遺体が見つかったりもしました。やっと見つけましたよ。お帰りなさい。手を合わせながらそう心の中で呟きました。

多くの被災者から感謝されポランティアのやり甲斐と社会貢献の意義を感じつつ仕事をこなしてききましたが、それと同時に、無差別に命を奪う災害の恐ろしさや、命の儚さについて考えさせられました。エンジニア志望だった自分でしたが、自然科学への強い関心と、他者を助けたい使命感から、自然と医師になりました。心から思う様になりました。一緒に汗水流したポランティア仲間も、当時の自分の背中を押してくれました。震災を通して出会った各地方からのポランティア仲間は、今でも連絡を取り合うかけがえのない友人たちです。

震災は、確かに多くの尊い犠牲を出しました。と同時に、自分のような一人の若者の人生を変え、様々な一期一会の機会も与えてくれたのも事実です。人生の転機に遭遇したのは私だけではありません。正義感の強い、ある友人は支援活動に参加したことを機として警察官を志しました。また、心優しい別の仲間は介護福祉士を目指しました。それぞれが強い信念を持つて志望した道を歩んでいます。中には震災を機に出会い、後に結婚し新たな命を授かった仲間たちもいます。震災は悲しい現実だけを生み出した訳ではなく、様々な若者たちに人生の分岐点を与えたのです。

時は早くも10年が経ち、世間の関心と記憶が風化しているのも否めません。気が付けば、私は来年にも医学部を卒業し、米国で医師になります。人の命を守る、助ける仕事に就くことにもともち誉を感じます。医師道を極める自分にとって、やはり原点は東日本大震災です。10年の節目に改めて原点回帰。同時に当時の体験や記憶を私は絶対忘れません。震災で亡くなられた方々のご冥福をこころで祈り、この文を終えます。